

# タイム 時間のT：タイムピース

2023年

映像（30点）：フラットスクリーン（30台）

アプリケーション（12点）：フラットスクリーン（10台）、タブレット（2台）

1秒 - 無限

「タイムピース」は英語で「時計」や「時間を測定するもの」という意味をもつ。展示室各所に置かれている42点の映像は、異なる種類やスケールの時間を表している。日めくりカレンダーや、バイクのヘルメットに映り込む景色はリアルタイムで移り変わり、ひまわりは実際より早く咲いては枯れ、シジフォスの石は山頂に届く前に落ちるのを繰り返す。そのような一般的な時間、または目に見える時間のあらわれとは対照的に、男がりんごの皮を剥きながら思いに耽る姿や、こどもが写ったアルバム写真が体現するのは、主観的で内的な時間だともいえる。

# CDOSEA

2017年ー

映像：シングルチャンネルプロジェクション（16:9、カラー）、リアルタイム・アルゴリズム編集システム、インターネット、2チャンネルサウンド  
時間無制限

「東南アジア」という名称は、第二次世界大戦中、連合軍が作戦上の用語として使い始めたことから定着した。しかしこの呼び名が思い起こさせる地域としての同一性は、そこに存在する文化、宗教、言語、国家体制の複数性とは相容れない。

ホー・ツーニェンは 2012 年、「これまでにひとつの言語や宗教、政治形態によって統制されることのなかった東南アジアに統一性をもたせるのは何か？」という問いを起点に、「東南アジアの批評辞典」と題したプロジェクトを開始した。本作はその一部としてのオンライン・プラットフォームである。その骨子となるのは、この問いへの応答としてホーが編纂したアルファベット順の用語集と、ボーカル・パフォーマー、音楽家、プログラマーとの協働である。本作のために作られたアルゴリズムは、各用語

がアクセスされる都度、その注釈を歌にしたボーカル・パフォーマンスと、東南アジア各地で行われたフィールドレコーディングの音源、そしてインターネット上で集められた動画を組み合わせる。この無数の編成は、東南アジアに関する具体的な物語や固定化した表象を生むことなく、連関と差異を生み続け、東南アジアという総称に含まれるあらゆる要素が、とめどない変容の過程にあることを示唆している。

「東南アジアの批評辞典」はホーの研究と制作の土台となっている。本展でも展示されている《名のない人》(2015年)、《名前》(2015-17年)、《一頭または数頭のトラ (リダックス)》(2017年)も、このプロジェクトから派生した作品である。

# ヴォイス・オブ・ヴォイドー虚無の声

YCAM とのコラボレーション

2021 年

映像インスタレーション：6 チャンネル HD プロジェクション（16:9、同期、カラー）、マルチチャンネルサウンド

VR：ヘッドマウントディスプレイ、ゲーミング PC、バイノーラルサウンド

映像：各 7 分 45 秒

VR：時間無制限

ホー・ツーニエンと山口情報芸術センター [YCAM] との協働で制作された本作は、京都学派に焦点を当てている。京都学派とは、京都帝国大学で教えていた西田幾多郎（1870－1945 年）と、田辺元（1885－1962 年）を中心に形成された哲学者たちのネットワークである。日本がアジア各国で植民地を拡大し、太平洋戦争へと突入した 1930 年代から 1940 年代初めにかけて、西田の「絶対無」を基軸に戦争の倫理的意義を説いた彼らの哲学は、思想界を超えて大きな影響力をもった。その思想は陸軍の皇道派や内閣情報局からは反国体的思想だと危険視された一方で、戦後になると今度は左翼的、進歩的知識人たちから侵略戦争に協力したとして厳しい批判を受けた。京都学派の戦争協力や国家体制との関わりについては今でも解釈が異なる。

近代を乗り越えるという切望が、政治だけでなく哲学をも駆り立てていた当時、個と世界、そして国家をどのような視点から捉えていたのだろうか。

本作は「京都学派四天王」と呼ばれた高坂正顕（1900－69年）、西谷啓治（1900－90年）、高山岩男（1905－93年）、鈴木成高（1907－88年）が座談会を行った「左阿彌の茶室」、田辺元の講義が聞こえる「空」、三木清（1897－1945年）と戸坂潤（1900－45年）が収容された「監獄」、そして西田の思想空間ともいえる「座禅室」という4つの空間から成るVR（仮想現実）が軸となっている。鑑賞者は、「左阿彌の茶室」「空」「監獄」を仮想カメラで撮影した映像を映し出す同名の3つのインスタレーションを巡り、そこに登場する哲学者たちや彼らのテキストについて、背景にあった出来事や人物と合わせて知ることができる。一方VRでは、体験者は自らの身体の動きや姿勢をとることで4つの仮想現実を行き来しながら、哲学者たちの声を通じてその言説に触れることになる。

# タイム 時間の T

2023 年

映像インスタレーション：2チャンネルHD プロジェクション（16:9、同期、カラー）、リアルタイム・アルゴリズム編集合成システム、インターネット、紗幕スクリーン、8チャンネルサウンド

60分

ホー・ツーニエンにとって、時間は自らの作品の歴史的、地政学的、哲学的文脈に関わるテーマであると同時に、映像をベースとした作品制作における主要な要素でもある。この最新作は時間そのものを主題とし、かげろうの一生、素粒子の相互作用、異なる仕掛けをもった様々な地域の時計、ホーの友人の家族アルバムやホームビデオなど、幅広いスケールの時間の象徴や捉え方を表すものとして、ホーが収集した映像とテキストで42の章を構成している。

ここでは、2面のスクリーンの後方に素材の映像が、そして前方にはその映像をアニメーション化したものが投影されている。2つの映像は重複と差異、原像と残像といったレイヤーを生み出す。本作のために組まれたアルゴリズム編集

システムは、映像の内容を選んで物語性のあるシーケンスを編成すると同時に、映像の配列を決め、そこにテキストを読む／歌うボーカル・パフォーマンスと、サクソフォン奏者による即興演奏の音源を組み合わせる。生物の寿命、物理学的に数値化可能な時間、社会統制のツールとしての時間、音楽的リズムとしての時間、そしてノスタルジアを含む心理的時間などが次々と展開し折り重なっていく。そのような本作は、様々な時間のあらわれと個の経験を接続し、想像や情動を生起する機構であるともいえる。

# ウタマ―歴史に現れたる名はすべて我なり

2003 年

映像インスタレーション：2チャンネルHD プロジェクション（4:3、同期、カラー）、2チャンネルサウンド

21分27秒

本作はホー・ツーニエンの最初期の映像インスタレーションで、シンガポールという国家の起源を紐解こうとするものである。建国者としてよく知られているのは、19世紀末、シンガポールでの植民地建設を率いた英国東インド会社の行政官トーマス・スタンフォード・ラッフルズ（1781－1826年）であるが、「シンガポール」という名称の由来はそれより前の時代に遡ることができる。本作は、13世紀、航海の末にたどり着いたその地を、サンスクリット語で「ライオンの町」を意味する「シンガプーラ」と名付けたとされる、パレンバン（現在のインドネシア、スマトラ島）の王子サン・ニラ・ウタマを取り上げ、歴史と神話がまじりあう領域を拓いてゆく。

本作でウタマを演じる俳優は、その祖先といわ

れる支配者たち、さらには東西の航海者たちへと次々に姿を変え、ウタマの神話的寓話を他の神話や伝承へと接続してゆく。そのような像の変容と増殖は、ウタマとは誰かを不明瞭にしなから、起源は存在するのではなく、起源の希求こそがその像を形作るということを強調している。ここでの口頭伝承のような語り、俳優たちの誇張された演技、クロマキーを使った背景の合成といった作りこみは、国家の起源という企てとその作為性を仄めかしてもいる。

発表時は 20 点の絵画と映像で構成されていた本作は、今回新たに絵画を映像に組み込んだ 2 面の映像インスタレーションとして展示される。

# 一頭あるいは数頭のトラ（リダックス）

2017 年

映像インスタレーション：2チャンネルHD プロジェクション（16:9、同期、カラー）、12チャンネルサウンド

33分33秒

トラは境界を行き来する存在として、ホーの作品にしばしば取り上げられてきた。マレー半島では、古くからトラは人間の祖先とされ、人間がトラに、またはトラが人間に変身する人虎に対するシャーマニズム的信仰も存在した。植民地時代以降、大量に狩られたことで絶滅の淵へと追いやられたトラは、人間の自然に対する所作を映し出す存在でもある。他方、第二次世界大戦中には、この地域に別の獰猛なトラが現れ、遭遇者たちを恐れさせた。1941年のマレー作戦でイギリス軍を降伏させ、「マレーの虎」との異名を得た日本帝国陸軍司令官、山下奉文はその一人である。

本作でトラに遭遇するのは、19世紀初期にイギリス植民地政府の委任で公共事業監督官としてシンガポールに入植したジョージ・D・コール

マン(1795-1844年)である。この遭遇の瞬間はハインリッヒ・ロイテマン(1824-1905年)による木版画《シンガポールで妨害された測量》(1865年頃)に描かれている。ホーの《一頭あるいは数頭のトラ》では、トラとコールマンは3Dスキャニングとモーショントラッキング技術で動きを与えられ、宇宙空間を漂いながら歌い、その周りを月、太陽、地球が巡る。トラとコールマンは、その遭遇の瞬間から、東南アジアにトラがすでに存在した100万年前の過去、そして20世紀から現代までの未来へと時間を旅しながら、シンガポールの歴史における権力の錯綜を展開してゆく。

# 名前

2015–17 年

映像インスタレーション：2チャンネルHD プロジェクション（16:9、同期、カラー）、12チャンネルサウンド

16分51秒

《名のない人》（2015年）と同時期に制作された本作は、1954年に太平洋問題調査会から出版された『マラヤにおける共産主義闘争』の著者、ジーン・Z・ハンラハンという人物を取り上げている。マラヤ共産党に関する最も重要な文献とされている本書は、入手困難なマラヤ共産党の機密文書に基づいて書かれていることで知られている。しかしハンラハンについて明らかになっていることは少ない。彼が軍事作戦から童話まで幅広い領域の書籍を執筆、翻訳、編集したことから、ハンラハンとは複数人の著者の偽名であるとの説もある。

ホー・ツーニエンは本作において、31本ものアメリカ映画とイギリス映画から、タイプライターを打つ男性の映像をサンプリングしてつなぎ合わせ、正体が判然としないハンラハンを描いて

いる。つなぎ合わされたイメージの集積は、白人の男性作家にまつわる映画の常套的表現を強調するものでもある。1枚のスクリーンの両面に映し出される映像には、ハンラハンに関する相容れない説明が英語と中国語で付されている。英語のボイスオーバーは、ハンラハンによる、またはハンラハンについてのテキストを、中国語のボイスオーバーはハンラハンに関して「私」が執筆したテキストを読み上げている。複数の矛盾する声とイメージのもつれは、不明瞭な人物像を描きだすと共に、その名前を名乗っていたのは誰なのかという問いを再提示する。

# 名のない人

2015 年

映像インスタレーション：2チャンネルHD プロジェクション（16:9、同期、カラー）、12チャンネルサウンド

21分15秒

本作は、第二次世界大戦中とその後のマラヤ共産党に大きな影響を与えた、ライ・テクという人物の生を掘り下げる。20世紀初頭、フランスの植民地下にあったベトナムに華僑として生まれたライ・テクは、当初インドシナ共産党員として活動していたといわれている。しかし、フランス当局に逮捕されたことをきっかけに、当局のスパイとして他の共産党員について諜報するようになった。その後イギリス植民地政府に引き渡され、今度はイギリス当局のスパイとして、1934年、シンガポールに送り込まれる。表向きは中国からのコミンテルンとして、すでに混乱の中にあったマラヤ共産党に潜入したライ・テクはすぐに影響力を増し、1939年にマラヤ共産党中央委員会総書記にまで上り詰める。1941年、日本軍がマラヤに侵攻しイギリスを降伏させてからは、ライ・テクはイギリスと

日本軍の二重スパイとなり、その立場を利用して党内のライバルを排除することで、絶大な権力を手に入れると同時に、党を弱体化させたといわれている。

いくつもの偽名を持ったこの人物の物語は、1989年から2013年にかけて製作された16本の香港映画から、ホー・ツーニエンがサンプリングしたひとりの俳優の映像の断片によって構成されている。幅広い役柄—その多くはスパイや裏切り者でもある—と、抑圧された感情の機微を見事に演じる俳優の演技は、ホーの緻密で巧みな編集によってつなげられ、姿を変え続けたライ・テクの輪郭を描くと同時にずれをもたらす。その像はライ・テクの生を形成したであろう矛盾、裏切り、暴力、秘匿性を表すとともに、マラヤ共産党の歴史の多くが未だに明らかになっていないことを示唆する。